



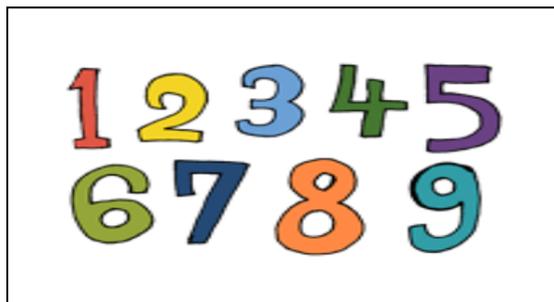
心理学科

こころについてのエッセイ No.2



文字に色が見える：「共感覚」の世界

数字や文字を見て色を感じる人がいることが知られており、このような感覚は「共感覚」と呼ばれます。黒く書かれた数字の「1」を見ると赤く見える、という具合です。音を聴いて色を感じる人もいて、ロシアの作曲家スクリャービンの例がよく知られています。このような共感覚の持ち主は、以前は10万人に一人と言われていましたが、現在では1%程度と言われていています（横澤, 2010）。



共感覚を発見したのは、19世紀イギリスのフランシス・ゴルトン（進化論で有名なダーウィンのいとこ）です。彼は、共感覚が遺伝に関係があると考えましたが、同時に、創造性にも関係があると考えました。共感覚は、小説家や芸術家には一般の人よりも8倍も多くみられると言われていています（ラマチャンドラン、2007）。

なぜ、共感覚は創造性と関係があるのでしょうか。共感覚を説明しようとする理論には様々なものがあります。その説の一つに、脳の「紡錘状回」^{ぼうすいじょうかい}と呼ばれる部位で数字と色の処理が行われているため、という説があります。脳の中で近いところで処理されるために、数字を見るたびに、対応する色が見えると考えられるのです。

共感覚は、サヴァン症候群と呼ばれる人たちでも報告されています。サヴァン症候群は特殊な発達障害で、自閉症を伴う一方で、音楽、美術、数学などに天才的な才能を示します。サヴァン症候群であるダニエル・タメットは、1から12までの数字に独自の形と特性があると言います。1はパツと輝く白い光、6は寂しい小さな黒い穴、3は緑、4は青、5は黄色という具合です。彼は円周率を2万桁以上記憶したことで話題になった人ですが、数字と色や形を結びつけたと述べています。

共感覚に近い働きは、ほとんどの人が経験していると考えられています。例えば、「黄色い声」「明るい人」などという表現は、色と音や対象の様子が結びついていると考えられます。これは隠喩・メタファーと呼ばれる表現ですが、私たちが共通に持っている色とその他の感覚の結びつきがあって成立していると思われれます。皆さんも音や音楽から色を感じることはありませんか？

